
アナタノオト

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナタノオト

【Zコード】

Z3758M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【アルト×シェリル】ブレラとシェリルのその後。おまけにはランカも。

拍手おまけ話あり

小さな電子音が鳴り扉が滑るように開くと、甘い香りと共にこの部屋の主が帰ってきた。

ふわふわの綿菓子のようなストロベリーブロンドは肩口で三つ編みに結われ、淡いピンクのサテンのリボンと白いレースのリボンで飾られている。

シェリルは持っていた花束とケーキをキッキンテーブルに置くと、続けて入ってきた青年に優しく声をかけた。

「ブレラ、大丈夫？　ごめんなさい。思った以上に買い込んでしまつて……」

「大丈夫だ、問題ない」

「今、お茶を入れるわね。座つて待つて」

両手にあふれんばかりの荷物を抱えて、しかし涼しい顔をした青年は宝石のような紫色の瞳をシェリルに向けると、眉間にしわを刻んだ。

「まで。動くな」

「え？　きやつ」

シェリルは何が起こったかを把握する前に、ブレラの腕の中に包み込まれていた。

「気をつける。ただでさえ足下が見えにくくなっているんだ」

「あ、ありがとう。お掃除ロボットに躊躇いたのね」

シェリルの大きなお腹越しに見える床には、シェリルが蹴倒してしまったお掃除ロボットと、ブレラが放り出した荷物が転がっていた。

「ブレラ……」

「問題ない。ワレモノはそっと置いた」

この惨状を、なんでもないことのように書つブレラに、シェリルは笑みがこぼれた。

「そう、ならないわ。さあ、ナイトさん。私をお茶を煎れられるようにはキッチンまで連れていって」

ブレラはシェリルを抱きかかえると、そっとリビングのソファーに座らせた。

「ブレラ?」

「座つていろ。俺が煎れる」

「でも……」

「無理をするとお腹が張つてくれるぞ。お前は少し疲れているようだ、言つ事を聞いておけ」

「チヨックしたの?」

「いや……カンだ」

「ありがとう。それなら、休ませてもうつわ」

大きなお腹に優しく手をあて撫でながらシェリルは、ブレラが荷物を片付けたりお茶を煎れたりしている様子を見ていた。

「ねえ、アナタ。アナタには生まれてくる前から、とってもステキなナイトがついているのよ。彼なら、ずっと……アナタを守ってくれ

れるわ。だからまずは、無事に生まれて来なさい」

それに答えたかのよつこ、シェリルのお腹の中で赤ちゃんは動いた。

「あ

「どうした?」

ティー・ポットを持つて怪訝そうな顔をするブレラ。その姿に何とも言えない笑いがこぼれそうになるのを堪えながら、シェリルは手招きした。

「なんだ?」

「動いたのよ」

「何が」

「赤ちゃんが

ブレラはさりげなく諭そつな顔をする。

「う、動くのか……?」

「ええ、もうだいぶ大きくなっているもの」

「バジュラの幼体が成体になるところしか想像できない」

「…………そ、それはちょっと……想像したくないわ

つわりもおさまつ、最近では気分良く過じていたが、昔見たエイリアンものの映画などを思い出してシェリルは気持ちが悪くなり口元を押された。

「す、すまん

「いえ……大丈夫よ。ねえ、お腹に手を当ててみて。話しかけてみて？」

「は、話しかけるのか？ 何を？」

「それぐらい自分で考えなさい」

ブレラは恐る恐るシェリルの大きなお腹に手を伸ばす。これ以上はないというほど、優しく、力を入れず、慎重に手をおいた。それに反応したかのように赤ちゃんが動く。お腹の中から突き上げてくる振動にびっくりしたブレラははっとして手を離した。

「おい。突き破つて出でこないだらうな

「だから、やめてってばその発想！」

「しかし……」

「んもうー。今日は機嫌がいいのよ。すぐ動いているもの。耳をあてて、じらさんらい。命の音がするわよ」

「命の、音……」

珍しく怯えたような表情をしながら、ブレラは膝まづき、シェリルのお腹にそつと耳を当てた。

ドクン。ドクン。

リズミカルに、たまに蹴りやパンチの音も加わりながら、ブレラの頭に響く。音。

「このおおと……」

シーリルはブレラの頭を優しく撫でながら、微笑んだ。

「ねえ、ブレラ。あなたやランカちゃんのお母様も、こうしてあなたが生まられてくるのを楽しみにしていたのね。命の音が途切れませんように。無事に生まれて来ますように。生まれたら今度は、無事に育ちますように。ケガをしませんように。病気になりませんように。幸せでありますように……。親はいくらでも望みが出てくるのね、贅沢ね、参ったわ。でも、それほど愛しているの。あなたも愛されていたの。今でもずっと」

「ああ…… そうだな、シーリル」

命の音を聞きながら、ブレラは瞳を閉じて優しかった、温かかった母のことを思い出す。

「お母様だけじゃなく、私やランカちゃんもあなたのこと心配しているのよ。私のボディーガードなんかして、たまに違う任務もこなしていくようだし……。あなたはこの子のお守りもしなきゃいけないのよ、怪我なんてしてられないですからね」

フッ。とブレラは優しく微笑んだ。

「わかつている」

心地よいリズムと温かいぬくもりにこいつしか、ブレラは眠りに落ちていた。遠くでショリルの歌声が聴こえる。

アナタノオト ドクン ドクン ドクン

聴(ヒ)えてくるよ ドクン ドクン ドクン

生(アキ)てる音 やわしい音 だから切ない音 聽(ヒ)めてくるよ

眠(スリ)てしまつたブレラにショリルはブランケットをかけ、ブレラが運んで来てくれていた紅茶に手を伸ばす。

「長旅から疲れて帰ってきたダンナに、どうこう場面を見せるんだ、

お前は

「あら、アルト帰つてたの。おかえりなさい」

荷物を預けてくればいいのに、自分で持つて帰つて来ているうちに、軽く息を切らしているところを見ると、フロンティアに着くなり急いで帰つてくれたのだろう。シェリルは愛しさがこみ上げてきて、紅茶を置くと、どびきりの笑顔でアルトに両腕を伸ばす。アルトは少々不機嫌ながらも、ソファ越しにシェリルを抱きしめておでこに口づけた。

「ただいま

自然とアルトの視線は、自分の妻のお腹に抱きつく姿勢で寝ているブレラに向かう。その視線の意味を知つてか知らずか、シェリルはシッと口元に人差し指を持つて来て「疲れているの。起きるまでおいておいてあげて」と言つた。

「お前なあ……」

「あら、妬いてるの？」

「べつ、別に」

シェリルは真っ赤になつてそっぽを向くアルトを見て吹き出した。出逢つた頃と変わらない。思いが通じ、夫婦となり、二人の子どもが授かつた今でも。

「バカね。ブレラは私にとつて大切な家族よ。グレイスと同じぐらに愛しているわ。でも、私にとつてのイチバンは、アルトとの子

なの、解つているでしょ？」「

アルトの鼻をきゅっと軽くつまんで、こちらを向かせる。アルトはバツが悪そうに視線をさ迷わせたあと、諦めたようにため息をついて「そうだな」とシェリルを抱きよせ、久しぶりに味わう柔らかな温もりと甘い香りに酔いしれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3758m/>

アナタノオト

2010年10月10日14時05分発行